の電氣が人を吸ひ附けるかも知れぬ。誠に恐ろしい力はこんな所から來る。やがて巍峨たる山が雪をめじろして眼に入つた。あれは御嶽山だと誰かゝ云ふ。翠寰美しく優く群山の上に挺出してゐる。朝日を受けて黄金の冠を頂き連峯を朝せしめる姿は實に崇高なものと云ふより言を知らぬ。是の山を友達が登つて居るなど思ふと思はず萬歳を叫ばずには居られない。

御嶽の姿は雲につゝまれ雨雲の近づいた時上松の驛に着いた。一先づこゝで降りる。頭がふら〳〵してまだ山が動いて居るやうな氣がする。此處で第一隊と合して富士山へ向ふ。

藤本吉一

上松驛にて花月先生中村君家森君をむかへて又も車上の人となり、しばしまどろむ内驛夫の聲に驚かされ大月驛に降りぬ。時に午前二時四十分。電車にて志田口に向ふ。

鷄鳴曉を報ずるころ夜はほの〴〵と明けはなれ山寺の鐘は平和な寂寞の空氣を破つてそれからそれと傳つて來た。

窓を通じて雄大なる富士を仰がんとすれば白雲天を覆ひ富士の姿は未だ見ねない。

お富士さん雲の衣を脱がしやんせ

雪の御肌が見たうござんす

とは我々一行の歎願であつた。

電車はひた走りに走つた、おゝ雄大豪壯な富嶽が夏の朝霧を破つて現はれた。あゝ不二だとしばし眺めてゐる内に吉田口に着いた。

動かざること山の如しとよい哉譬諭や悠然として迫らず何物にも犯されざるを示し雲井はるかに聳ゆる樣見る吾等をして一種の靈感を抱かしめ身心共に高潔ならしむる。

富士の根の麓を出て行く雲は

足柄山の峰にかゝれり

スタート八合目迄

朝食を濟まして麻の草鞋をつけ足の運びも輕く金剛杖を片手に登山スタイル勇ましく吉田を後にせしは八時前であつた。朝風いと凉しく吹き來り二三町にて杉の木立いと深き淺間大社の鈴をならして無事登山の祈願をこめ坦々たる登山道へと進んだ。

八面冷瓏杉の並木の間に繪の如く見ゆる峯も白雲重

疊として玉體をかくす。

一行は廣漠たる裾野に咲き滿ちた草花を蹈み黑い火山灰の大道を辿つて二里餘にして一合目小屋に達した一行登山ファストの一休みスタンプを求め茶を飲んで四錢取られ聊か驚いて顏を見合せた、此處は海拔三千餘尺。

白雲樹間より湧き一行の面をかすめて去る。落葉松山榛木等林帶も過ぎ更に除々と登り行けば全山毛欅繁茂し老鶯健全尙ほ囀を弄するを聞く。其幽趣雅致。實に唯一の慰安である。

かくて我々は二合目三合目と除々に進み登つた。蝸牛ゆつくり登れ富士の山。

一行は二隊に別れた一隊は桃井先生の先發隊で一隊はいつも殿を申し承る佐久間先生の率ひられる所である。

福山「先生今日中に頂上まで行かれますか？」

福山の奴大分弱音を吐きやがつた。當日新進の花月先生曰く「あい福山何を云ふて居る今日中に頂上に着き御鉢廻をするのだ」と豪語される。併し先生蟹の樣に横に歩かれる頗る滑稽だ。五合目に着いた頃福山の姿が見ねない。

A「福山の奴どこへ行きよつたのやろ」

B「知らんぞ！　彼奴大分弱つたからへたばつたのかも知れんね」

その側を通つた行者さん

「學生さんの樣な人下の茶店で一服してござらしやるよ」

A「ありがたうそうですかとう〳〵彼奴弱りくさつたね先生どうしませうか？」

佐久間先生「俺れが行かう」

流石先生だ痛い足をひきづつて行かれた將來の登山家を以て任ずる我輩

「余も行かうと豪語したが足が重たい」

佐久間先生と我輩と共に下り福山を連れて又も五合目へと登つた。佐久間先生と福山を後に殘して我輩得意のランニングで登る、併しなか〳〵足がはかどらん七合目でやう〳〵花月先生に追ついた。

「先生大した事はないのです、後から後々と登ると云ふて居りました」

「そうかそれで安心したさあ行かう」又も登り始め

た。
大橋「あそこに見ねるのは八合目だね」
A「そうだろ早く登ろ」
大橋「ウンー……」大橋の奴も大分弱つた。やつと着いた。しかし我等の豫期は全く裏切られた。それは七合三勺であつた、やつとの事で八合目に着いた。見れば嬉しや彦中山嶽部御宿と記してあるではないか前に豪語された花月先生も默つて宿に入られた。
宿には先發隊の桃井先生の一隊はすでに休んで居た
B「あゝくたびれた」
A「おれはこれから頂上まで行くのだつたらもうあかん」
B「しかし八合目で宿ればよかつたね」
O「あゝ寒い〳〵にらい霧だね明朝は天氣やらうか？
C「人夫さん明朝の天氣は如何だぁ」
人夫「大丈夫でげす明朝はきんと御來光が拜めますだ
A「御來光は何時頃ですか？」
人夫「四時頃でげす」
C「あいもうよい加減で寢よう、しかし佐久間先生や福山は如何したのやろ」と云ふ言葉下より「中なる彦

中諸君に物申さん」と登山者の知らん人がは入つて來た。
「何事ならんと皆一せいに外口を見る」
「あのね下の二人の方かね本日六合目で宿る明朝頂上で會ふとの事ですよ」と
我々はいさゝか安心の胸を撫でゝ床の中に入つた。
A「オイ爺さん蒲團をもう一枚くれない？　寒くて寢られんぞおいお爺！」
B「オイお爺けむたいぞ我々を狸と間違へとるか」お爺の奴一向返事がないで一枚の煎餅蒲團をくれただけこれだけでは三人　とてもやりきれん。
しばらくうつ〳〵とすると何だか私語する聲かするなんだらうか？
何だ大橋の奴の寢語か何を云つて居るだらう「七合三勺！　七合三勺」彼は唸つてゐる。
併し我々も知らぬ中に旅寢の夢を結んで居る。

天方　健一

七月二十九日上り八合目より御殿場に到る。
冷い風が服を通して泌みるのを感じて夢一つ見ずに眼が醒めた——雨戸が一尺ばかり開いてゐる。今日は七月二十九日だ。時計を見ると三時「おいもう出發しかけたがよいぞ。」草鞋を履き換へて外へ出る。天空には星燦然。前方に薄白くたなびきて一線をなすは雲か山か將海か。ぼんやりと天界と下界とを境してゐる樣だ。邊りは冷たく靜まり返つてゐる。その靜けさに自ら戰慄が躰を襲ふ。そして絶へず白い息が吐き出される。
一行僅か十有七人、提灯持つを失達に星の光が助けにて、天地の分れし時ゆ神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺に脚が下を首下げ見れば光も淡し三日月湖、紫、赤に色增せば漸く東と知るを得て、六根清淨九合目を過る頃ほひ昨日の疲は胸つき八丁に攀ぢ行く姿はうねりくねりひ這來る笠の數、遽かに燃ゆる朱の色に遙かな天涯地角に搖ぐは炬火か、全山を震はす如き鬨の聲響く時しも一行は北口頂上久須神社には著きにけり。
多くの人々は朱印燒印を貰ふ爲に右往左往。何々屋何何屋と屋號を掲げた石室が五つ六つ並んでゐる。名物團子を頰ばつて火口壁を廻る所のお鉢廻り——一里あるさうだ——に出かける。それは何と云ふ素早らしい物凄い火口だらう。底さへ見ねぬ火口の壁は熔岩で成る斷崖絶壁だ。その偉大なる地獄の力に寄せつけられつゝ我々は回轉運動を始めた。——賽の河原から銀明水、奥宮、其の側には郵便局がある。皆大小の熔岩を積み重ねた石室だ。それから吉田から五里十一町廿四間の劍ヶ峰の頂上に達した時我々は正に一萬二千四百九十尺の高所に聳ねてゐた。火口に面した方には富士の萬年雪が動かなかつた。そして吾々が前面を見渡した時快哉を叫ばずには居られなかつた。所謂浩然の氣が心の底から湧き起つて來る樣に感じた。——遠く白雲の上に突き出てゐる山々が恰も富士山頂にある吾々に媚ぶるが如きを又日出でゝ三竿富士の裾野に其の黑色半面影像を我々の姿も見ねるだらうと思はす程判然と作り出してゐるのを見た時に。藤本君と澤村君と僕とが尙進んで親知らずの險を過ぎ小火口に達した時白皚々たる雪の上に立ち今やつて來たと言ふ佐久間先生と福山君とに出會つた。金明水に口を濕めらして一行が銀明水に會した時九時。そして我々は御殿場口へ險しい坂を下り始めました。八合目へ來た時「之より約二里壯快なる砂走り」と書いた立札に衝き當つた

それから半時間ばかり砂烟を立てゝ天空を翔るが如く走り下つた時其所はもう二合目だつた。そしてもう汗を流して上衣をぬぎハア／＼言ひながら登つて行く何處かの生徒の一團を見た時吾々は昨日の疲勞を思ひ出し、何となく彼等に同情する念が起つて來た。太郎坊で一休むと非常な足の疲を感じてきた。そして三臺のガタ馬車はガラ／＼高い音を立てゝ乘つてゐる我々をひどく搖りながら、なだらかな富士の裾野の坂道を三里十町ある御殿場指して走つてゐました。驛前の旅館に到着した時それは午後一時でした。二階で晝飯をすますと藤堂君と橋詰君は歸り殘りの吾々は一晩宿る事にしました。オヽ日は暮れる。旅行は終る。何となく悲の情が身に迫る。もやに包まれた御殿場の町に明るい電燈がついた。ザワ／＼と表通が騷がしいのは滊車から吐き出された登山客だ。彼等はどう云ふ積で富士登山口に出かけるのか知ら。

山蚊が一匹もゐないのを氣持よく思ひ疊と蒲團で始めて寢る心持を感じました。

福山松太郎

卅日　前日來の疲勞は御殿場驛前の一旅館にて一泊休

養し其翌朝我々一行は土產物も數々に數日の旅行も樂しく終へて御殿場發下り列車に乘り込み歸途に付いた

ぼんやりと曇つた朝靄の中を悠々として富士の前面を走つて行く。惜しいことには今朝の曇天が昨日我等一行の踏破したあの玲瓏たる富士玉容をふりかへしむる事を得しめなかつた。斯くして我々は單に各自の印象を眼前に髣髴たらしむるに止まつた。

時間は刻々として列車の進行と共に、天候漸く晴れ車窓より展開される東海の風景亦良く、七月の赫耀とした炎熱は狹困しい車内に入つて來た。一行の者は車内彼方此方に三四人陣取つて新聞雜誌を讀んゐた我。我校野球部は京津大會の第二回戰に敗殘の憂目になつた事を知つたときは實に無言の感に打たれた。

過ぐる驛々に賣つてゐる清凉劑に渴を防ぎつゝ一行の者等とともに雜談していたがやがて靜岡に着し、山葵漬や辨當を買つた。其の後何時の間にか大井川や幾多の驛を越えて再々として走つて行く。やゝあつて列車は鐵橋上を通過してゐる。左右の海面は日光に照らされて白帆數十沖に漁する、いとさやかに見ゑる。豫ては無味寂然たりし辨天島も流石三伏の時季中は海水浴客の爲め、列車一度此所を過ぎて空席は非常に多くなつた。

車中の蒸し暑さは程限にて蒲郡にては我々一行の過半が下車されて、日中の暑さを海水浴にて過ごされた車中に居殘つた我々は新聞雜誌を讀みながら暇を費やすのみにて遂に我も居睡して終つた。

東海道の中京の稱ある名古屋の稍前にて目を覺ましたが歸途なれば服裝も亂れたれば見物もなさで其儘車中に居つた。名古屋後の行程は特別長く感ぜしも時刻の遷移に遂に我々は夕方彥根の地の歸り、一行は各自の思出を胸に抱いて我家に歸つた。

本年の彥中山岳部の行程は之で終つた。來年は日本アルプス縱步を企てようじやないか、深山幽谷を踏破して天の靈氣を養ふではないか。

岩國、宮島見物記

奥居俊一郎

過ぎ去つた四十日の休暇中の生活を回顧して見ると其處に忘れる事の出來ぬ一日が、判然として頭に浮んで來る。それは僕が廣島に住んでゐる懷しい叔父を頼として行つて、其の地方を見物した最も穫物多い盛夏の十日の事である。

叔父と從弟と僕の三人は、一點の陰影もなく晴れ渡つた、そして日盛の暑氣を思はせる薄明に、勇み勇んで風雅な岩國に、山紫水明の宮島等を探勝すべく漸く覺め、漸く活動せんとする都を後に己斐驛を發車した

そして海岸近くを西へ西へと驀進して居る時「鳥居がッ……」と誰とかが叫んだ。と同時に車中の人々は、細波淪漣たる海中遙かに劃然として立つ嚴島の大華表を見入つてゐる。自分もそれを瞠りながら流石は日本三景の一たる名にそむかないと思つた。やがて「宮島！」と驛夫の聲が聞ゐると立錘の餘地もなかつた人々はなだれを打つて車外にと吐き出された。我々一行は此所の歎賞を後の樂として、更に西に走つた。程なく岩國驛に下車した。併し驛から町迄は、二里近くの距離があるとかで電車が通じてゐる。雅かな町へと電車に乘つた所が驚いたその搖方。或は左に、或は右に、或は天に昇るが如く、或ひは地に入るが如く全く膽をつぶす恐しい電車だ。そして豐する樣な車響を擧げて、桑畑の中を走りつゞけてゐる。平然として老車

掌が來た。そして「一寸鋏を忘れて……」と言ひながら切符を手で破つてゐる。暢氣なものである。しばらくして岩國町に着いた。錦の樣な川に、其名日本三奇橋の一として堅牢と巧妙とで世に聞えてゐる錦帶橋の袂近くに立つた時、その建築。その景色。そして反橋の上は階段となつて、車馬も行かず唯人の悠々濶歩する姿。

此等しとやかな風景は、腦裡に深く印象されたのだ

この眺には、神聖にして犯す事の出來ぬものがあつた川端を渡る涼風は一行の面を拂ひ、潺々たる水面には銀波は走つて氣爽快である。四つの石疊の支柱に五つの反橋があるばかりで、修繕しても、まだ一度も架け換へをした事が無いと言はれてゐる。唯サラ〳〵と流れる水は清く透つてゐて、早く游ぐ魚、日々水に洗はれる石等見る事が出來た。民家も古風な、詩的なもので頗る落ちつきのある町で、不知不識その昔を思はしめる。公園も見た。

此所を去り汽車で宮島に着いた時は、十二時前であつた。一同は包み切れぬ樂みを制へて汽船によつて別世界である嚴島に向つた。うね〳〵と寄せ來る漣は、

船側に白く碎ける。白泡生じて玉と見ゑ、飛び散つて雪とみえ、渦卷いて花の如くなり眞に神の水である。その彼方より生じた樣な大華表は、默々として天に聳えてゐて恰も泰然自若として立つ絕代の偉人に對する樣な感がある。下船した後一茶店で中食した。それから一筋道の兩側に色とり〳〵の土產物を陳列せる店の間を素通りして、神の御前に額ずくべく進んだ。やがて一行は大華表の汀に立ち止まつて見渡すと、丁度滿潮前で、社殿は海上に浮び出た樣で逆に影を映ぜる樣は、莊嚴無比でとても言葉や筆では名狀することが出來ぬ。廻廊を靜かに進んだが、恰も水上に在るが如く俄かに水の香氣と冷氣とに抱かれて今までの苦熱も一時に忘れ仙境に徘徊する樣に覺えて、我知らず襟を正した。廊下の板が踏む度毎に微音をたてる。大前に拍手を打つたが、その響が消えた時、莊嚴と云はうか、神々しいと言はうか、形容する事の出來ぬ神秘に打たれたのであつた。此の社は官幣中社で、市杵島姫命が鎭座ましますといふ事である。本社とかの大華表とは廊嘴たる火燒前と一直線になつてゐて、此處を中心として左右の廊下は略同形である。廊下を出で集り來る

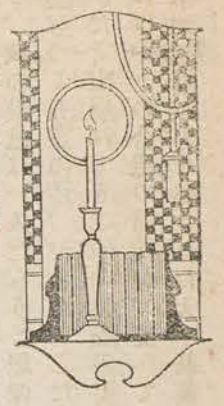
神鹿と戯れてそこを去つた。暫く松蔭に息ふてもう一度と顧ると、西の濱の綠濃い松木並、は眞白な燈籠と相映じて、松葉越しに拜する社殿との眺は眞に千金にも價する一幅の繪で一同は恍惚として去ることはしがたかつた。

不圖時計をみると二時過ぎ。己むを得ず此所を出て芝生の公園をも逍遙し、山路をたどつて英傑淸盛の經納塚へと志した。山の端にある坂道に、熱砂を踏み、炎光を背おつて、焦熱地獄の苦を味ひ、あへぎ〳〵登つた。が途中處々に樹間から見ゐる海の壯觀は、疲勞を醫する料となつた。小徑の傍に塚は、墓石を標しに淋しく殘つてゐるのみだ。併し彼淸盛の精神は、凉風吹く大松にも籠つてゐるであらう。彼の隆盛の遠き昔を今に偲ひながら、當時彼が通つただらう跡をあゆんで、二重の塔前も素通りして、紅葉多い谷間をゆくとき、秋の景色は一入だらうと想像しつゝ、社東の天に雲をつく五重の塔、がらんとした大堂千疊閣の下に着いた。山崩れでもこの千疊閣の姿は永久不滅だと言はぬばかりの合抱の圓柱が、支へてゐる。その中央には奉納、奉獻等と記された大小新舊の杓子、累々として

天井にとゞく程の山を成して積まれてゐる。如何に多くの人々が此處に遊賞するかが自ら思はれる豐國神社は杓子の八重の墻堵に圍まれて參拜せられ尙杓子賣る一乙女もゐた。一農民より身を起して、日本國中はおろか、朝鮮八道の草木までも服從せしめた英雄豐臣太閤が、文祿元年嚴島神社に冥福を祈り、戰に勝を得て喜びの裏に、翌年記念すべく建築したと言ふ事であるこれ等の建物に口があつたならさぞ色々の物語も聞けようにに。たゞ泰然とし何等の變化なく何時まで風雨に晒されるのか。休息して懷しい故郷に音信した。

五時過ぎ。一抹の黑煙を名殘りに。一行は汽船に乘つて先の埠頭に浮んだ。

大華表も夕霧の中に淡い。



詩藻

星の嘆き

青山正郎

吹雪の夜、星は嘆きぬ大空に、
荒れ狂ふ怒濤にもまれ
岩に碎けし難破船見て

朧宵、星は嘆きぬ大空に
咲き誇る花の下にて
短夜を寢もねず苦しむ人を見て

綠濃きポプラの並木風そよぐ
大空の星は嘆きぬ今宵また
谿間に散りし白百合を見て

秋草の亂れ咲く野邊
咽び音をかすかに聽きて
大空の星は嘆きぬそのかみの
ありし其日の姿憶ひて

かくてまた嵐は吹きぬ
されど尙星は嘆きぬ大空に
賴る邊なき身の人を偲びて

幼き思出

紫水　青山正郎

海邊の住居は樂しいものであつた
朝夕の景色は殊に美しかつた
そして私は日增しに快くなつた

やがて二度目の春が來ても
私はまだ海邊に居た
波を淋しく友として

汽船が港へ着くやうになつて
夜の町は段々賑かになつた

反對に私の心は淋しくなつた
黃金の波が田の面を渡る頃
久方に都へ歸つた私には
待つてゐるはずの友はゐなかつた

冬枯の霜の墓場に
咽び入る學生があつた
止めどなき追憶の涙に

石碑は新しく小さかつた
けれども友情は離れ難いものだつた
病癒えよと祈つて吳れた人は
癒えた人の前にこんな姿をして居た

空しく石碑の骸を眺めて
何時までも何時までも泣いて居た彼
嗚呼三年前あの故郷の夢
若者は又新しい涙に誘はれた。

波の歌へる

桑原利夫

その樣な事は言ふな
わしはお前の悲しい事も　辛い事も
皆知つてゐる
然しわしはお前が悲しいといふだ
けでおれの仕事を止めるといふ
樣な事はとても出來ない
もう　少し待つてくれ
おれがこの岸を崩してしまつてから
　それからお前のいふ事も
聞いてやらう
それからお前の同情も私の中へ
入れてやらう

青春

藤本吉一

青春!!
おゝなんと尊ひタイムだらう、

おゝうら若き者よ、
何をそんなに考へて居る？
何をそんなに悶へて居る？

尊き青春も
再び來らざる青春も
大言壯語の使命論に醉ゐる其のひまに
一大空想を夢みてゐる其のひまに
おゝ過ぎ行くのだ！
遠慮もなしに過ぎ行くのだ！
汝の紅顏も土色に
汝の黑髮も白髮に……
なり果てゝしまふのだ

土色になつてからどうする？
白髮になつてからどうする？
覺めよ！　覺めよ！　覺めよ！
深きねむりより覺めよ
覺めて人生の生活美の根源を見よ
汝の希ふ美!!

そも何處より流れてくる？
汝の希ふ愛!!
そも何處より沸いて來る？
宗教が何になる？
哲學が何になる？
死んだ理論が理想が、何になる

おゝ覺めよ
夢想せる青年革命家！
日夜悶へてる青年藝術家！
温い人生に徹底せよ
温い人生に徹底せよ
人の世は愛のみだ
おゝ青年革命家よ
おゝ青年藝術家よ
行け　行け　行け
愛の殿堂に

小　虫

藤本吉一

小虫よ、
お前はなんにも知らないで
惡魔の肌へ飛んで來て
可愛い聲をはりあげて鳴いて居る
私は人間と云ふ惡魔だよ
早く去つて自由の御園へ飛んで行け
そして可愛い涼しい聲で鳴いてくれ、

キユーピーさん

藤本吉一

うす紫の小さいあつぼん
チョコンとすわつたキユーピーさん
オテ、ひろげて何を待つ
マゝさんだつこバゝさんだつこ
廣ひお部屋で只一人
いつまで待つても歸らない
バゝさんマゝさん、どこ行つた
ひとりぼつちで淋しかろ

私しのお友だち

藤本吉一

小鳥は
私しのお友達
家中皆で
笑ふ時
おのどふくらし
脊伸して
聲ふり立てゝ唄ひます。
私し一人で淋しい時
小鈴ふるやうな
聲をして
お話するやうに唄ひます
小鳥は
可愛いゝお友達

草笛悲し

藤本惠順

月が出た出た

小高き丘に
夕日影なく
草笛かなし

□

月が出た出た
野山を越えて
鳥なきゆく
草笛かなし

□

月が出た出た
小高き丘に
星がまたたく
草笛かなし

□

月が出た出た
野山を越えて
風の吹くたび
草笛かなし

青秋の哀歌

中　正男

月の光が靜に澄んで青い夜だ
蟲の鳴く音が冷に冴ねて
感傷家の理智性な
青い瞳を思はせる
私は地上にうつゝた
青い自分の影を追つて歩む

其處にも此處にも
理智的な冴ねた靜さ——
そこに哀れな歌がきこねてくる
「理智」の哀歌だ！

及物の樣に冴に切つたこの夜の空氣は
青い瞳の奥底の光の樣——
青い秋よ！
「理智」の哀歌が
物さびしく聞ねてくる！

『生の車』

中　正男

灰色の空の下——
煙つて濁る野路の彼方
道もない
石ころばかり
私は
重たい車に
負ひ切れぬ重荷を積で
冷い汗を流して
ガタ〳〵と引いて行く

灰色の空に
「死」の鳥のはゞたきが聞に
野路の彼方に凄しい唸り！
私は——
だゝ重い荷車を引く
「行かなくてはならぬから」だ
あゝ「死」の鳥のはゞたき

淋しさは百年の昔に消に
怖しさは百年の昔に墓の中へ消に
「神」から受けた
この「生の車」を
私は混沌の——
灰色の空の下に
どん〴〵引つぱつて行くのだ

けれど〴〵——
あの野路の彼方の唸り聲！
「死」の鳥のはばたき
暗くなる
道がわるくなる
すさまじい唸り、はゞたき！

あゝ私は　私は
「魂」まで
墓場へ入れなくてはならぬのか？！

生命の闘士

中　正男

夏も逝かんとして
太陽の熱光がさめる頃
白い沙の上に
こゝにも生命が闘士を見る
小さいこの闘士よ
お前も「生」のために
こうして働いて居るのか！
おゝ闘士——小さい戰士よ
お前のほんとうの名前は
私は知らないが！　私はよぶよ！
おい！　小蟻よ。と
白い沙はもうあの
太陽が灼熱の光りを放つて
白熱の刺戟を與へる夏もすぎたから
ほどよいぬくみだらう！
もう休んだらどうだ
直ぐに寂しい秋風が來るよ

生命の闘士よ!!
お前は本能の「生」への
勇者であり强者だ
お前は——
無意識に生命の爲に戰ふ
そこに努力の血と汗が
あらう——そして
生命への悦びがあらう！
おゝ闘士よ
又來年お目にかゝらう！

伸びゆくもの

北川壽三

月の光は河のやうだ。
濡れかゞやくなやましさに、
すべて物象は流れ行く。

萌にあがる丘の木立。
その梢の唇から、
不思議な息吹が乳のやうに湧き上る。

伸び行く芽の觸感は
かすかに小さく顫へながら
月の流れを押し返した。

寒空詩

傷けられたる魂の如く
ふるへをののく悲しき梢は
絃の如く鳴り
血みどろの合唱は
落日の前に怒號し
腐れ行く肉の如き夕陽は
絶望と悔恨の陰府に空しく引かれ行く。
凍りたる大地に刄の如き流れは横はり
鋭き鋸き感觸が灰色の尾を引き奔走し
生きものは死せるものの安堵さをなげく。
田園に都會に裂かれたる銀のあらしは滿わたり。
深き深きま冬の喧噪の底に
しづかに靜かな寂しさが
死のごとくひそむ
なごやかに微笑の如き

冬の陽が寂しき影をつくるとき
虐げられたる生きものは
太き太き息を吐く。
その蘇れる肉塊は
ざんげと休息の凍りたる
合掌に
ひそかにひそかに來ん春の幻を
夢みる如く嗚咽する。
今しも悲しき罪人の祕めたる祈りの
涙の果てが雪にもならず
時雨して

みゝず

玉田博道

虫がなく！
どこに？
はかばのくさむらに。
□
虫が鳴く！
いとも寂しく

黒土の中で。

□

虫が鳴く！
悲しいこゑで
地の中に消え入るやうに。

□

虫が鳴く！
死人の永久に眠れる
はかばの土の中に。

□

虫が鳴く！
人の魂を（地中に）ひき入れるやうに。
それが、虫が、蚯蚓だ。

水馬

沼の中の水すまし
ツイ！〳〵と
廻つてる。
廻つてゐてはチヨト止り
とまつては又廻る。

○

小豆のやうに圓いやつ
甲羅が黒紫に光つてる。
小さいやつが速いこと
廻りながらも餌をあさる
小さい塵にもチヨトとまる。

○

惡戯ざかりの兒童たち
小石をボンと投げてやる。
キリ〳〵〳〵と小さい軀を振りまわし
また四五尺も向ふにゆき
ツイ！〳〵と何喰はぬ顔。

○

夕方散歩に出て見れば
ゆる〳〵動く堰の水面に
ひるま見てゐた同じ水馬奴
またしても　またしても
ツイ！〳〵と回つてる。

○

ぢッとシャガンで見つめてゐた

田圃も川も一めんに
あたりは朦朧とほの暗く
たゞシャガンだひとところだけ
空が映つて仄白い
笹波にゆらぐ水おもに
四五の水馬がまわつてる。

（完）

月見草

佐藤　寛

朝なれば
悲しみはかき消ゆる。

夕なれば
悲しみは湧きいづる。

朝と夕とをゆき來する、
心のおもに、
あゝ月見草は咲きいでゝしぼむ。

夜の驛

澤　效一

夜の驛は
美しいともし灯の棲家
そしてその宮殿である。

暗い闇が
その屋根をつゝみ
あかりは窓から漏れてゐる
煤煙のたちこめた
巷の中を
歩み疲れた旅人は、

そこで
ベンチに腰をおろして
安息と淡い鄉愁とを覺える。

北風

青い空の下

廣い野原を吹いてくる
さびしい秋の北風よ、
はるかに遠い
野を越に、海越に
私の胸に
お前は何をもつて來る？

野べ

ふうわりした雲が
青空に浮いてゐる

はるかに風が吹いて來て
黄色い稻の
穗はゆれる

さらさらと
とんぼの飛ぶ音
風の音。

月

あらしの後の

月かげは

病める妹の
白き額か
青ざめて

かすかに震へる
靜けさよ

亂るゝ雲に
やはらかき
黑髪しのぶ。

夏の朝

中川英一

若葉の包みこんだ山寺から
幽かな力强い鐘の響が
朝霧を傳つて聞にて來る
蟬はまだ眠つてゐる
しかし小鳥は曉の空で賑に

しかし落ついて歌つてゐる
聞にる鐘の響には
小鳥の聲のおちつきとは違つた
あるおちつきが籠つてゐる
あゝしかし此の朝のおちつきも
一人起き二人起きして
次第次第にみだれて行く
そして全く靜けさの失せた時
太陽は赤々と萬象を照らしてゐる
人ははたけでせつせと働いてゐる

忍び寄る秋

すらり〳〵と秋が來る
太陽は火のごと大地に輝けど
忍び寄る秋の空氣は
雞頭の血色にあらはれて
空高く澄み渡り
吾が心すが〳〵し。

菊

蟲のすだきし八千草もうら枯れて
霜の滿ちた晩秋の庭に
白菊は今朝日の光を浴びて
寂しい中に獨り久遠の微笑を漏らす
霜風の流れ行く時
「快」と叫んで綻びる蕾から
黄色な香が朝の氣に擴つて行く
雪の樣な白い柔い花の愛と
その咲き誇る心とは
人の世の汚れを知らず。

焰

兒玉琢爾

眞赤な眞赤な焰
純潔のシンボル皎潔の象徴なる焰
ローズよりもダリヤよりも
もつと〳〵眞赤になつてもえ立つてゐる
長くもない一本のローソク
焰はその生命の細道を
得々として歩みつゝあるのだ

そうして無心に焔えながら
刻一刻死に近づいて行くのだつた
死は焔を大きく抱擁してしまつた
暗黒……

焔
ちやうど人の生命のやうな物だ

夜

或淋しい秋の夜
たつた一人書齋の机にもたれて
默想にふけつてゐた
靜かな靜かな夜の大氣の中に
遠くから淋しさうに
足駄の音が聞にて來る
そうして
間近く聞えて
又遠くの方へ消ゐ去つた
淋しく澄みきつた夜の大氣の中に

荒野の中で

茫々と生ひ繁つた雜草の荒野を
涯もなく
たつた一人歩んでゐる
靜かだ
ほんとうに靜かだ
そうして
廣い廣い荒野に抱擁された時
世の中の總てが
みんな靜かな物となつてしまふ

落葉よ

山口彌平

あはれ此落葉よ、
君はおのが心を知らずして
霜のしとねに夢を見る。
あはれ此落葉よ、
我は深き思ひに打沈み、
落葉林を過き行けば、

星影曇りて夜鳴鳥。
湧きこそ出ずれ、おのが胸。
あはれ此落葉よ、
おのが心を知らずして
君は永遠に打眠むる。
君はもう二度と目ざめぬ。
あはれ此落葉よ。
しかし今君は幸福だ。
義務を終へて安らかに、
霜のしとねに夢を見る。
して見ればおのが身こそは
あはれなれ。

和歌

○悲しき運命

野間二郎

二十餘り四歳送りぬ誕生を喜ぶべきか呪ふべきかよ
志事と違ひて漂浪の旅にあれども今宵を祝はん

去年までは希望ありきよ苦しきも今宵わが心何ぞ寂しき
漂浪のこの年々に野心なくたゞあきらめの悲しき運命
故郷に歸り來し人にわが父の老いて貧しときけるさみしさ
御心に添はずあれどもわが力なきなり父母よ許し給へや

○北國の冬

灰色の午后なりければ物思へば霰しぐるるあはたゞしきかな
電燈の光りまだしほのぐらき書齋に獨りわれは居るかも
開きてあれど書はよまざり寂しきを机上に白き茶山花匂ふ
その夕友は來ざりき故郷の父に捧げて長き文かく

○はつ日影

藤本惠順

はつ日影千代田の宮の松が枝に、いやとこしへの光ますめり

○かどまつ

梅が香にさそひ出だされ松竹の、千代の緑に色そふる

かな

○吾がいほり

北風におちば騒げる今宵こそ、去りゆく秋の名殘りなりけり

桐一葉ばさりと落ちし裏庭のあたりを寒く秋風のふく

○晩　夏

呉竹にとまる螢の一つこそなつのなごりのしるしなるらん

○荒神山を月下に訪れ

奥山に月影ふみてさまよへば雁の泣く聲鹿のなくこゑ

○母　校

懐しき回轉塔やポプラの木母校の秋の夕げしきかな

朝

木村謙次

靜かなる朝の日影を脊にあびて
　樂しく遊ぶ雀愛らし。

東方の古城山にかかりたる
　霧ほのぼのとあけそめにけり。

朝まだき七月の野に立出でゝ
　地理高々と暗誦したり。

朝早くねぐらのとりは夢さめて
　聲かまびすし今朝の霜かな。

我が出でし帝國舘のさはがしき
　音淋しみつ野路をかへるも。

よみあきて力なき目をそとあげて
　ながむる窓に青葉ゆらぐも。

野も山も皆眞白なる衣きて
　我が故郷に冬は來にけり。

いかなればかくあはれなるおもざしぞ
　親なき子らを見ればいとほし。

ほの暗き窓べによりて降りしきる
　春雨ききつ心寂しも。

夕やみに淡くなりゆく城山を
　なつかしみつゝ打まもりをり。

箱庭の小さき池に四つ五つ
　赤き紅葉のただよへるあり。

秋ふく風

澤效一

北風を横切りて飛ぶ鴉あり
　羽のすさびのあらはに見えて

ふと醒めて寒さおぼゆる秋の夜に
　寂しく雨を聞きにける哉

紫に曇りて水面うるはしく
　木々のうつりて靜かなりけり

秋となれば夕邊はしみじみ聞わくる
　我が家の屋根の小雀の聲

風さむき晩秋の日杉の枝に
　汽車の煙の殘されて行く

朝早し北風ありて馬車の行く
　此の街道に鴉なくなり

秋の雨

しとしとゝ雨の降る夜や挿花の
　ともし灯受けて默せる寂し

秋の日は遠き悲しき思出に
　涙ながしつ暮れにける哉

あさ霧にかすめる如く林行く
　少女子一人美しく見ゆ

雨の日に傘を忘れし淋さよ
　人の心もしづみて見ゆるを

灯を消して床に這入れば夜の雨の
　聞わくるなり靜かなる胸

嵐過ぎあけがた近し靜かなり
　眠れる弟の息のあらけき

風の吹き叫びけり秋の夜を
　床にひそみて小さなる息す

俳句

林檎

堀川辰之助

林檎食うて冬の寒さぞ知られける

木枯に額づく襟の寒さ哉

「師の(君なくて今日木枯に我等語らう)に答へて」

裏やぶの竹おりつくせ危の風

明障子梅ヶ香のみを通しけり

雨降つて聲もしめれり時鳥

黄に緑に春の野かざられけり

裏やぶに鶯寺の春深し

魚はにげ蛭にすはるゝ夏の川

偶作

松宮誠一

眠る村入口に干すかんぴやうかな
村の川急か造りの凉臺
親猫が足舐めて居り村の朝
夕立や破らるるかと恩ふ芭蕉かな
西瓜切る西瓜のやうな顔七つ
雨乞の鐘聞く夜や暑さかな
空晴れず今日こそ祖母の一周忌
きりぎりす蚊帳に來てなく夜半のさめ
岩上に歌ふ人あり夏の月
豊年やどの田を見ても劣りなし
吹きつける音物すごし夜半の雪
二三葉蛛蜘の巣に止る紅葉かな
門松は雪吹きつける山嵐
元旦や拍子おかしき小才藏
元旦や昨夜にかはる心持
日の光浴びて和尚の薪仕事

大空に唸を上げて競ふ

川柳

春の日や床屋に議論の花が咲き
新調の座布團を折る女客
マア可愛いしつこ臭いを抱く女
七遍も御免と呼んでヤット來
コリャうまい今度こそ男と父笑顔
嬉しくて走る拍子に鼻緒切れ

時雨

田中準一

稲村の藁の雫や初時雨
冬川の木の葉集めた谷の隅
獵人のふみ碎きしや霜柱
冬至迄すゝけて餘る南瓜哉
北窓の夢路をたどる冬がまへ
襟卷の儘に祖父の夜の膳
古寺の山茶花滋し人寂し
初雪やあたりにぎはし人の聲
霜の朝誰が通りし裏の道

眞夏迄殘して見たい屋根の雪
鮪より寒さ知らずの大根汁
犬さへも元氣おとろふ巽かな
古寺の鐘つく人や冬木立

木村謙次

○花

花散らす風の憎くさや夕まぐれ
晝も蚊のなく庭隅や百合の花

○梅

咲きみだる梅に月照る庭先や
鶯の來て鳴きゐたり梅の花

○

やすやすと眠る小猫や春の晝
ふはふはと雲か霞か山櫻
あちこちに釣する人や春の海
ぽつかりと月は出でたり琵琶の水

學藝部報

學藝部報（大正十二年度）

學藝品展覽會之記

大正十三年三月八日我部は學藝品展覽會を開催す。例年の通り圖畫習字が最も多かつたが此れ等の外に英習字等に於ても優秀なる物を見た。一般に本年度は圖畫習字英習字の範圍に止まり他の出品を見なかつたのは殘念である。其中秀逸品には左の通り等級を附す。

習字之部

優等　西澤久一郎　青山正次
一等　辻太郎吉　伊藤賢藏　三和晋
北川良一　中村英次郎　高祖伴
河合喜東　江龍傳次
二等　野村捨藏　小澤享　宮村又七
竹中康次郎　松宮誠一　川崎一郎
田中準一　二橋五男　小川信藏

楠　好雄　神鳥佐賀二　家森　實
重森　重吉　廣瀨　義影　宗宮　俊一
成川彌次郎　江畑啓一郎　北村　敏夫

三等　辻　勤　榊原　春藏　青山庄之進
野村　末藏　藤本　元博　中村　武司
辻　孫四郎　林　英信　竹林　彰
岡野　貞三　名畑　榮一　高橋　英雄
藤村由二郎　藤村辭次郎　江龍宗之助
西村　二郎　松宮　益三　清水　禪龍
堀井　齊　坂本　至誠　森谷嘉一郎

圖畫之部

優等　田附　利八　田中　潔
一等　西村駿一郎　脇阪　榮次　堀江　幸次
藤原　儀一　木村　龍善
二等　北川　壽三　前川　宗男　奥居俊一郎
右川　利脇　深尾　喜陸
三等　二橋　五男　澤井　謙吉　丹城　佳逸
江龍宗之助

（大正十三年度）

部長　山本　教諭
理事　五年　堀川　辰之助
同　同　鹿谷　義雄
同　四年　内藤　信夫
同　同　大谷　義雄
同　三年　山本　拾三

序

本年度學藝部は山本先生を部長と仰ぎ我等五名の理事は此所に微力を盡す事になりました。我等は部長の指導により隆昌に最善の努力をします。また唯辯論のみならず、學藝のあらゆる方面に大いに發展したいと思ひます。

五月十日米原町字筑麻青年團の主催にかゝる辯論大會に、辯士内藤信夫、吉田諦成を派遣す。

五月二十四日比叡山中學にて開かれたる全國中等學校辯論大會に鹿谷義雄を派遣す。

第一回學藝大會之記

六月三日午前九時より春季學藝大會を開催す。

内容及び概評

第一回　開會の辭　理事　鹿谷　義雄

「一節の詩句によつて一行の散文によつて人生の一瞬間を完全に表現し得ぬ樣な藝術は寧ろ細工と呼ぶ可きであつて藝術でない。」とルミ、ド、グールモン氏は云つて居る。と内容充實せる雄辯を以て聽衆を靜聽せしめ、緊張して居る講堂の空氣は尙一層緊張味を加へた。

第二回　部長の辭　部長　山本　教諭

過去二ヶ年の學藝大會に出演する辯士は殆ど同じ人である。今回始めて登壇する辯士は辻孫四郎君一人である。學藝會は校友會員六百人の學藝會にして辯士の學藝會でない。故に同じ人のみでなく全會員が校友會の爲活動される事を希望す。

第三回　恃む可き心　三甲　平塚　憲映

物質の恃みとならざるにより、自己の心を恃む可し心は惡化し易きものなるが故に常に自ら信じ得る心を作れ。

音聲大にして元氣あれ共、多少口調の早きを遺憾とす

第四回　大英雄の心　一丙　井口　良雄

大英雄ナポレオンと一老人の話を例にとり、大英雄の心を簡單に話した。話方が滯りなく上手であつた。

第五回　現代生活の興味、弱者の强みと慰み　四丙　北川　壽三

此の時聽衆がゆるんで來た野次におくせずやつたが内容が複雜であつた。

第六回　黑豆義經　一丙　河村　純一

義經が奥州より北海道にわたり、黑豆を以てその酋長を殺したお伽噺。面白く話したが、「ました」の連發が惜しい。

第七回　大國民の品格　二丙　武田　寛了

名譽に相應する人格が必要である。國民各自の品格を謹むは國民の公德である。

論詞は明瞭であつたが、朗讀的であつた事を遺憾とす

第八回　黃色流者　四甲　二橋　五男

日本が日清日露戰爭に於て一等國に列したとは云へ外にあつては排斥或は壓迫され、内にあつては奢侈に流れて居る。米國の排日法案の如きも其の例である。愛國心あらば、八億の同胞をして束縛の域より脫せしめ光明の世界に導かれよ。

言葉に重みあり、本日中最も勇壯なる辯論の一つであつた。

第九回　天罰　三丙　小川萬喜太郎

馬が驢馬に對する憐みの心が無かつた爲に天罰を受けたことより話し始め、四海同胞人類愛を稱へた。態度對話的でスピーチと云ふよりもストーリーと云ふ可きであつた。

第十回　古武士の面影　二乙　坂本　至誠
楠木正成の忠義を云ひ、彼は肉體的には死すとも精神的には永遠に生きると。態度も整ひ、相當熱もあつた。

第十一回　原因結果　一甲　中島　了義
如何なる事柄も原因ありて結果を生ず。我等の十年後の成功失敗は今日の努力の如何による。最後に詩を吟じた。

第十二回　野心なき者は醉生夢死す　三甲　山本　捨三
アムビシヤスマン卽ち野心を抱いてゐる人、標的を有してゐる人は、苦痛に打勝つて最後の勝利を得ることが出來るが、野心のない人は何等の所信なきために一波一浪に翻弄せられて、徒に行路難を叫ぶのみであると。稍々謹嚴すぎた樣に思はれた。

第十三回　人の心　四甲　辻　孫四郎
急雷の如き拍手の止むを待ちて徐に口を開き、廢兵は國家の犧牲者である事より話し、全き人よ不具者を愛せよと叫んだ。
論詞演題にふさはしく、音聲明瞭にして態度に愛嬌あり、始めての登壇にも拘らず、部長の辭の時より聽衆の期待に滿足を與へた。

第十四回　ハーモニカ　三乙　富永志賀三　二乙　奥村　一男

第十五回　一人息子
一人息子が旅行した話で、話しぶりがうまく聽衆をして腹をかゝゐさした。

第十六回　學生の本分　一甲　安部　直智
修身的に話して、態度が良かつた。

第十七回　經濟上より見たる日米戰爭　四乙　松宮　誠一
若し次に戰爭が起るとすれば、日米戰爭を想像す。それは支那に於ける日米間の權力爭ひから起るだらう米國が我が支那に於ける經濟上の利を防害せんとする時我は武を以て立たざるを得ず。
特に言葉の後尾明瞭であつて、態度に落着きがあつた

第十八回　學問の目的　三乙　粟田　春雄

現代の學問の目的は誤れるか？　世人は衣食の爲に學問する者の如しと。
內容豐富なるも聽衆騷がしく徹底せざりしを遺憾とす

第十九回　雪舟と鼠　一乙　山口　彌平
雪舟が和尙に叱られて、木に縛ばられた時、こぼれた涙を以て足の先で描いた鼠が生きて繩を切つた。
論詞明瞭で態度に落着があつた。

第二〇回　ブラジル移民の有望を前提に教養ある諸名に　四乙　近藤　文雄
日本人は世界の各方面に勢力を有せしが、現在支那北米に於て排斥せられつゝある。唯有望なるはブラジルのみにて、人口の密度一平方哩に付一人の割合で、北米人の如く有色人種を排斥しない。
態度に元氣あり、ブラジル移民奬勵を遺憾なく述べた

第二一回　意志の力　二甲　大久保直順
意志の力により健康すらも左右せらるゝ事をセシルローズの例をとつて述べた。

第二二回　茶目公の寢言の餘り　五丙　堀川辰之助

第二三回　レシテーション　四甲　大谷　義雄

第二四回　二人の王子　一乙　高田外次郎
二人の王子バラカンとジエルランとの話。
バラカンは慣の王子ジエルランは眞實の王子、この二人が爭つたがついにジエルランが勝つたと云ふ物語り

第二五回　意氣の鼓吹　四丙　內藤　信夫
渾圓球上の者皆更始一新改造の氣運澎湃として、春潮の如く漲る時、東洋の平和を維持するは大日本帝國の使命である。この大使命を帶ぶる帝國の休戚は一にかつて元氣潑剌たる吾等青年の雙肩にあると。

第二六回　詩吟（本能寺・捨子）　五丙　堀川辰之助

第二七回　正義　二丙　深尾　喜陸
正義と愛と兩々相俟たざる可からずと。
態度に落着があつた。

第二八回　ケチンボ修行　二甲　東　清哲
獨逸に於ける或ケチンボ家の修行。話方が上手で聽衆を面白がらせた。

第二九回　青春惜む可し　四丙　楠　好雄
青年は青春と云ふ巨大なる財產を有する大富豪である。青春は黃金を以て再び得る事能はず。青春に過せる我等は時を逸せず大いに修養に勤む可し。
詞明瞭にして態度に落着きがあつた。

第二〇回　ハーモニカ合奏　四乙　近藤　文雄
三乙　富永志賀三
第二一回　社會改造の根本要義　三丙　須山清太郎
改造は改造の爲の改造に非ず。現在社會に於て改造す可き事は、資本主義、軍國主義、勞働主義、平和主義である。
論詞明瞭にして元氣があつた。
第三二回　奮闘か安樂か學徒の前途や　五甲　重森利一郎
現代青年は唯學校に行けば良いかの如く皆學校に行く。あの現象は如何と。此の時また聽衆がだれて來て騒しかつた。
第三三回　男であるの自身を持て　四甲　那須　行英
「男でござる」の一言は無限の力を有するものである野次にひるまず大なる元氣をもつてやつた。
第三四回　ランドム　アーギユメント　四甲　吉田　諦成
現代帝國の政治家は勿論宗教家、教育家は墮落し、其裏面に意氣悄忱せりと述べ、耽溺惰弱に終らんとする彦中赤鬼健兒よ、敢然奮起して野心ある彦中とせよさもなければ廢校にして彦中の費用を國家の費用に滿せよと叫ぶ。
第三五回　自由の鐘は精神にも破れた　五丙　若林辰次郎
米國は自由の爲正義の爲獨立して世界の一等國となつた。米國は今其の心髄を露骨に表して、利己主義より世界の平和を忘れて大和民族を排斥して居る。
內容豊富にして聽衆によく聞かしむるに妙を得て居た
第三六回　琵琶
第三七回　閉會の辭　理事　堀川辰之助
雄辯を黄金に譬ふる時沈默を白金に譬へんと。此所に春季學藝大會三十七回の番組の終を結んだ。
閉會後辯士の茶話會を開き諸先生からの一々御親切な批評があつた。
六月二十八日岐阜縣立大垣中學校にて開かれたる、近縣中等學校辯論大會に堀川辰之助を派遣せり。

第二回學藝大會之記

本學年度第二回學藝大會は、十月十八日午前九時より開かれぬ。次に內容及び批評を畧記す。尙當日は、他校辯士數名の出演ありたり。

一、開會之辭　理事　堀川辰之助
天高く馬肥ゆるの候、又吾等の思想の肥ゆる候なり此の時に於て秋期學藝大會を開くを喜ぶ、と。
二、童の心　二甲　大久保眞順
越後の良寛禪師幼事の話。
三、木村重成と山崎三阿彌　一甲　小西誠太良
稍不徹底の點あれども、一年生としては上出來。
四、實力ある者の强み　三甲　奥居俊一郎
將來は實力の世の中にして、學位門地の世に非ずと叫ぶ。態度良し。今少し熱を。
五、幸ある人　一甲　多賀　啓照
一日の幸は勞働より來る。かせぐに追付く貧乏は無し。元氣あり抑揚自在感心〳〵。
六、現今の世界の狀態　二甲　岡庭　雅
七、是くの如く聞け　四丙　內藤　信夫
宗教心を養ふて心に信仰と云ふことが出來れば、何人も皆一樣に修養を保つ事が出來る樣になつて來るのである。斯くの如く安心立命の地位を得れば如何なる人も常に樂天怡悅歡喜の心を持して、安靜に一生を送ることが出來る、と。
八、我が國位を見よ　二甲　丸橋　秀夫
九、海賊三公　三丙　小川萬喜太郎
態度に落付あり。君獨特の話しぶりにて、三公が生きて來た。其上身振りも上手。
十、人生否定の悲哀　四丙　北川　壽三
「私はどうてい現在の私に滿足出來なくなつた。私には宗教も哲學も何の權威をも持たぬ。かく人生否定の悲哀の渦中に苦しめられて居るが、未來には赫々たる光明が輝いて居る。而し現在の私に滿足出來ない私が、どうして未來に……」と。噫!!　君の人生否定の悲哀のとびらは何時になつたら開くでせう。
十一、加藤高明の出世物語　一乙　藤田新次郎
十二、スパニッシュ、セレヲード、ラ、バロマ　四乙　近藤　文雄
十三、猥りに不幸を口にする勿れ　二甲　宗宮　又一
人生の禍福は、糾へる繩の如く、人間萬事塞王が馬
十四、喧嘩は愚の骨頂　二乙　川村三知雄
十五、謔八百の誠一　一乙　中川　豊三
お伽噺。音聲明瞭、冒頭結末其宜しきを得。

十六、暗黑の巷に棹さして　比叡山中學　荒樋　秀實
十七、彦中生諸君に　四乙　松宮　誠一
奮起せよ彦中生!!　と健兒の奮起を促す。
十八、下田港外の悲憤　二甲　居長英三郎
十九、日米問題の一考察　四丙　越後　正
二十、晝の出來た話　一乙　大鳥　居謙
態度落付きあり。
二十一、信　念　五甲　岩佐芳太郎
オルレャンの少女に付き信念を說いた。態度は落付き過ぎと思はれた。內容は豐富。
二十二、奢侈を誡む織物師　二甲　東　清哲
お伽噺であつたが、君のとぎれの無い全く面白い話に、喧々噪々たる聽衆もはたと謹聽し歡喜滿足は其極に達した。
二十三、デカンショ!節の俗謠を嚙んで。　四甲　吉田　諦誠
元氣溢るゝばかりにて加ふるに豐富なる內容を以て熱辯を吐いた。
二十四、ボートマンライフ　五乙　笠原　和雄

ボートマンライフとしての經驗談。
二十五、支配道德と勞動道德　彦根工業　木村五郎
二十六、永遠に生きる者　膳所中學　高橋　大六
二十七、國家有用の人物たれ　彦商　中村　俊雄
二十八、曉鐘は青年の胸を打つ　三丙　須山清太郎
曉の鐘は青年の胸を亂打す。帝都の復興と共に民心をも復興せしめよ。
二十九、バイオニャ出でよ　四乙　近藤　文雄
三十、學問の悲哀　五丙　若林展次郎
學問は人を向上せしむる者であるのに、世間には往々學問の道を誤つて社會に働けない人となる者がある諸君は學問して、社會に働けない人と成りたいか。諸君は學問をして社會の寄生蟲となりたいか。諸君よよろしく學問の道を誤る勿れと。
三十一、閉會之辭　理事　鹿谷　義雄
盛會裡に終焉の幕を閉ぢ得るを最も喜びとし、且此の大會に一つの光明を與へられた外來辯士諸君に厚く感謝する次第なりと。時に三時十分。
閉會後辯士の會合を開き諸先生からの御親切なる批評を賜つた。

柔道部報

第一回長濱農學校遠征の記

大正十三年六月七日晴天。於長濱農學道場
審判　瀧本先生　本多先生

本校　長農
辻　日比
堀　河　平野
高野　瀨　松本
中　本　船
宮　村　虎　山
副將　西　澤　上　川　副將
◎大將　種　村　矢　野　大將

先鋒の辻大外刈を以て見事破り西澤も又た敵の大將を投げ種村を殘して凱歌を揚ぐ。

第二回八幡商業學校對校試合の記

大正拾三年七月十八日　於本校道場

八商　本校
野　田　西　澤
中　島　桂　卷

細　井　長谷川
川　橋　堀　川
野　瀨　高野瀨
中　川　種　村
副將　西　村　宮　村　副將
大將　近　松　辻　大將　◎

我が軍よく戰ひ長谷川の抑込業、種村の左跳腰目覺しかりき。宮村、辻は戰はずして勝を制す。

大日本武德會第二拾五回青年演武會出演の記

希望に滿ちた一學期も過ぎ諸君が家で長い日を樂しく送つてゐる時、我が部選手は汗の稽古衣を着て青い疊に投げつ投げられつ涙を流し汗を流して練習を致しました。或る時は武德殿を夢見て先生の命をよく守りました。

七月廿七日午前八時優勝旗返還式後開始

×（本校　桂　卷　喜一）
（大阪至心館　谷　川　政一）
×（生野中學校　和住洵二郎）
（本校　堀川辰之助）

×（關西學院中學校）井上正勝
宮村又七

×（本校）高野瀨陳吉
（京都第一商）中川茂

×（市岡中學校）小西辰夫
（本校）辻富三

○（本校）西澤久一郎
（海南中學校）北岡弘

○（本校）種村誠一
（西條中學校）久門光

支部の都合上滋賀縣中等學校全部團體試合に參加するを得ざりしを悲む後に初段の試驗ありき。

第三回膳所中學對校試合之記

大正十三年九月廿三日、於本校道場

審判　本多先生　午前十時半開始

膳中　彦中

堀江×辻
樹下×長谷川
里内田中
川崎×山口
奥村中

村上
高野堀川
桂×
田中宮卷
副將樋口村
大將岡田高野瀨副將
種村大將

此の試合は新進の選手多く西澤の病氣なりしを悲しむ

第四回彦根工業學校對校試合の記

十三年九月十一日、於彦根工業道場

審判　本多先生　午後二時半開始

彦工　本校

池田南城
中村×中
小林佐々
遠山×西村
馬場瀧上
清水×田中
原奥居
副將平中長谷川副將
大將辻高野瀨大將

西村、中、高野瀨よく戰ひ引分試合となる。

滋賀縣教育會主催武術大會の記

九月來の猛練習を彦根高商の菊地初段及び第三高等學校の山崎二段に御願しその指導の下に固業を研究し勇氣百倍せり。

十三年十月廿六日、於長濱農學校道場

午前八時開會式　直に演武に移る

第一回戰

本校　長濱農業

○辻木船
西澤×平野
宮村×越後
初段種村×虎山
大將高野瀨×上川
本校　三點　長農　二點

第二回戰

本校　八日市中學

○辻横川
○西澤尾本

宮村×中村
○初段種村井
大將高野瀨×馬場
四點　一點

第三回戰

本校　水口中學

○辻牧ノ矢
○西澤伊地知
○宮村片淵
○初段種村漆間
大將高野瀨高谷○
四點　一點

第四回戰

師範　本校

澤木辻○
○内木西澤
北川×宮村
副將堀江×種村初段
○大將富岡高野瀨大將
三點　二點

我が總點數十三點なりしも膳所中優勝せり
當日遠路御應援下された諸君に厚く御禮申上ます。

彦根高商竣工記念柔道大會出演之記

十三年十一月廿三日、於高商道場　大谷中學

本校
辻 ―×― 小山
宮村 ―×― 村田
○西澤 ―― 波多野
副將 高野瀬 ―― 河尻○
大將初段 種村 ―― 黒川○二段

西澤巴投を以て村田に勝ち勢盛なりしも破れ高野瀬の引分に終り。兩軍の大將相戰ふこと八分遂に武運盡きて敗れぬ。

御幸記念武道大會柔道年級紅白試合の記

亂取之形（取方 種村誠一 / 受方 高野瀬陳吉）

一、二、三、年級紅白勝負

紅軍　白軍
東林 ―×― 夏原
池田 ―×― 岡城
大崎 ―― 吉川
阿原 ―×― 中野
三浦 ―― 田附
西川 ―― 長谷川
家森（光） ―― 藤田
屋敷 ―― 北川
吉川（彦） ―― 廣田
北角 ―― 目加田健
山口 ―― 河合
力石 ―― 江龍（宗）
大竹 ―― 尾元
曾我 ―×― 安部
内片 ―― 安居（榮）
大島 ―×― 角田
田中（倉） ―― 北村（敏）
北村（順） ―― 本池
青柳 ―×― 岡田
居長 ―― 田中
氏原 ―― 辻村
坂本 ―― 中川

目加田 ―― 北村（敏）
西村 ―― 前川
45 毛利 ―×― 漢見
吉田 ―― 實川
武田 ―― 豊田
宇野 ―― 高祖
谷川 ―×― 野村
4 大谷 ―― 澤田
大西 ―― 西堀
種毛 ―― 井上
末松 ―― 中村（喜）
吉居 ―― 不破
竹園 ―― 寺村 5
北村 ―×― 西崎
宮崎 ―― 辻（文）
長田 ―― 本山
樋口 ―― 粟田
伊藤 ―― 田中（良）
口分田 ―×― 大橋（善）
伊藤 ―― 水部
池田 ―×― 守野
草川 ―×― 疋田
谷川 ―×― 上坊
田附 ―― 三和
藤浪 ―×― 中村（榮）
大久保 ―― 天谷
杉本 ―― 一居
宇治原 ―×― 谷川
中川 ―×― 小財
宗宮 ―― 江畑
古澤 ―― 堀江
伊吹 ―×― 北村（彌）
安澤 ―― 郡田
中島（彌） ―×― 西脇
上田（善） ―×― 村田
古川 ―×― 瀧上
清水 ―×― 佐々
西川 ―― 榊原
古川 ―― 織田

渡邊　松宮
百々　本多
植田　奥居
副將西村　奥川副將
大將長谷川　田中大將

四、五、年級紅白勝負

紅軍　白軍
中川　森野3
居原田　森
家森　村岸
小川
家森（秀）　野村
小菅　×　隄
川西（金）
鈴木　重森
重森（孝）
山口　的場
辻常
玉田　青山4
尾本

池田　寺村
藤村（宗）　桂田
大谷（五）　北村（繁）
笠原　花澤
桂田（幸）　田中
淺岡　川崎
辻　西川
伊吹　赤井
藤本　赤田
竹腰　×　青木
西濱　三和
桑原
副將脇坂　高森副將
大將桂卷　堀川大將○

柔道外來選手對校試合

×○
○〔長濱農學校
　本　松本
　　長谷川

○○〔長濱農學校　淵田中元
　本
　　〔八幡商業學校　福島
○　本　　中
×　〔八幡商業學校　古谷
　本　　西村
×　〔彦根工業學校　辻（竹）
　本　　高野瀬
○○〔彦根工業學校　中村
　本　　辻
×　〔彦根高等商業校　長谷川
　本　　西澤
×○〔彦根高等商業校　初段菊地
○　本　　初段種村

一二三年級紅白勝負＝＝＝白軍之勝
四、五年級紅白勝負＝＝＝白軍之勝

受賞者

第一等　五人抜　三年　寺村
第二等　四人抜　二年　毛利
　　四年　青山
　　二年　大谷
第三等　三人抜　四年　森野（種村記す）

武術部報（劍道部）

本年は特に前例を破つて武術例會を開くことゝした。此の日一天快く晴れわたり萬目豁然として新綠滴るばかり。春は正に酣にして駘蕩の氣に包まれた古城は高く天に峙つてほゝゑみ、千古の奇を傳へる琵琶の湖は一碧萬傾、漫々乎として天を仰ぐ。何といふ壯なる景色だらう。この大自然の懷に抱かれ造化の神の膝下に育まれた赤鬼健兒の溢るゝばかりの意氣を見よ。何といふ勇壯なことだらう。血湧き肉躍る腕と腕、抑へ難き意氣と意氣との相搏ち相迫る烈しい火花。あゝ勇壯なる幾多の戰士の凛々しい奮闘を見よ。こゝに雄々しき闘士の戰ひのあとを尋ねん。

五年級

1（藤野○×
　西村○
2（長谷川○○
　上田（久）
3（北村
　三原○○
4（梅本
　山田○○
5（北村（四）○
　上田（久）○○
6（堀川○○
　藤野
7（岩佐○○
　上橋
8（西濱○○
　西村○
9（若松
　伊吹○
10（柳吉○○
　重森